



世界の ミカタタイムズ



発行：学校から世界のミカタを考える会

四季があるのは日本だけだと思いませんか？世界中どこにでもありますよ。

世界遺産教育をご存知ですか？

「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録が決定しました。

ところで「世界遺産教育」を耳にしたことはありますか？

世界遺産教育は「世界遺産についての教育」「世界遺産のための教育」「世界遺産を通しての教育」の三つに分類できます。

「世界遺産についての教育」は世界遺産について、こういった歴史的価値があり、なぜ登録されたのか、そもそも世界遺産とは何か、世界や地域にはどんな世界遺産があるかなど、また世界遺産をめぐる問題点などについても取り扱うことがあります。

「世界遺産のための教育」は、世界遺産にどのように接して、振舞うべきかなどについての教育です。

しかし、ここで強く取り上げたいのは「世界遺産を通じての教育」です。これは危機遺産を例に考えると分かりやすいでしょう。多くの世界遺産が紛争地域に存在しており、文化的、社会的な立場の違いを理由に破壊されています。反面、修復工事などにより危機遺産から脱却することができた遺跡もあります。これらの、実際に世界で今起きている出来事をケーススタディーとして国際理解、国際協力の重要性に気づくことができます。

人権や平和、環境保全や文化の多様性、社会的公正とは何かといった現実の世界が抱えている問いに対し考え、市民の意識に働きかけるこれらの教育は、国際理解教育や平和教育、ESDなどと言い換えても何ら不自然さはなく、つまり世界遺産教育と私たちの活動は密接な関係にあります。

さて、今回の宗像の世界遺産について立ち返って考えてみましょう。

世界遺産への推薦が決まってから今日まで様々な人に出会いました。登録への期待を口にする人、観光客の増加を見込みそろばんを叩く人、「宗像がかわってしまう」という一抹の不安を覚える人、そして改めて沖ノ島と関連遺産群について学びなおそうとする人。まさにこれらを題材にしたものが「世界遺産についての教育」といえるでしょう。そして、これまで頑なに人の介入を拒んできた特殊な沖ノ島に対し、私たちがどのように接して、守っていくかについて考えることが「世界遺産のための教育」です。

最後に、「世界遺産を通しての教育」を今、世界のミカタは作成しています。私たちは沖ノ島から様々なことを考えることができます。例えば、「女人禁制」について。今後、女性差別の撤廃を理由に上陸を迫る人が出てくることは容易に予想できますが、これらについて私たちはどのように向き合っていくべきでしょうか。また、それとも関わってくる話ですが「信仰」についても一つのテーマとして拾い上げることができるでしょう。古来から守り続けてきた信仰から私たちが学べることはまだまだあるはずです。

(参考：田淵五十生/中澤静男,2007,ESDを視野に入れた世界遺産教育)



宗像・沖ノ島大宝展より
増浦行仁氏の撮影した沖ノ島



教えてちよっただけ!
国際理解教育入門

ファシリテーションって何?(その6)
雰囲気を変える主語の力。

意見や利害が衝突するファシリテーションの場では険悪な雰囲気はつきものです。ギスギスした場面から少しの発言で全体の空気がガラッと変わるときは、本当に気持ちのいいものです。もちろんその時々で適切な発問は変わってきますが、汎用性の高いテクニックを一つご紹介させていただきます。

それは、**<主語を変える>**ことです。

皆さんも経験則的にご承知かと思いますが白熱すれば白熱するほど、視野が狭くなっていきます。そして、一つの考えに意固地になってしまいがちです。

そんな時は主語を変えてみましょう。

例えば「私は〜だ!」と一つの意見に固執する人に対して「なるほど、それでは『私たち』ならどうでしょう?」と問いかけてみると、ハツとした顔をするのが見られるはず。そして少し冷静になって、違った角度からの意見が出てくることでしょう。主語を変えることで、客観視することを促し、新たな視点で考えることができるからです。

逆に「地球規模で考えて〜」と大きな話をしがちな人に対しては「私たちの身近な出来事、足元についてはどのようにお考えですか?」と、小さな議論を促すことでも議論の行き詰まりや嫌な雰囲気を払拭したり、新しい議論を誘発したりすることができます。

忘れてはいけないのは、会場の雰囲気が険悪になるということは、前向きな状況であるということです。感情をぶつけ合えるほど思いがそこにある証拠に他ならないからです。つまり、舵取り次第で宝島へ到着する予兆と言えるでしょう。

世界のじがいも



今月の写真

ここはどこでしょう?



同じようで違う、違うようで同じ。
教室の面白さですね。

拡大した画像はホームページにあります。
バックナンバーと合わせてどうぞ。
「世界のミカタを考える会」で検索!

私が住んでいたミクロネシア連邦の学校にエアコンはありませんでした。毎日暑いな〜と夏思いながら汗を流して授業をしていたことを夏になるたびに思い出します。
常夏の島で毎日元気に走り回っていた子どもたちの生活環境を考えると、最近よく耳にする「幼少期に汗をかいたり寒さを感じたりする事ができず、しっかりした体温調節機能を育てる事ができる」というのが本当なんだろうなと思います。
暑い日には暑いねと言いながら汗をかき、寒い日には寒いねと言いながら毛布にくるまる。そんな当たり前が幸せだと思える社会の担い手になってほしいなと思っています。
うちの子どもが夏バテ知らずに育つかどうかは続報をお楽しみに!

ちなつママの
グローバル子育て日記

